慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『顕注密勘』の顕昭注の成立時期再考
Sub Title	
Author	新田, 奈穂子(Nitta, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	三田國文 No.66 (2021. 12) ,p.15- 42
JaLC DOI	10.14991/002.20211200-0015
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20211200-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『顕注密勘』の顕昭注の成立時期再考

新田　奈穂子

序、『顕注密勘』の顕昭注の成立時期の先行研究

『顕注密勘』は顕昭の「古今秘注抄」に定家が注を加えた歌学書である。以下、本稿では本書の顕昭注を顕注、定家注を密勘と呼ぶ。

久曾神昇氏[1]は、顕注の執筆時期を文治元年（一一八五）成立の顕昭『古今集注』より先であると推定されている。その根拠は、寿永二年（一一八二）成立の『後拾遺抄注』に「ハナザクラノコト、古今注ニ委注了」とあり、文治元年成立の『古今集注』を指すとは考えられないことから「ハナザクラ」の注を持つ顕注のことである、と推定され、顕注の成立を『後拾遺抄注』成立の寿永二年（一一八二）七月または追記された元暦元年（一一八四）九月以前、と結論づけられている。昭和五十六年に久曾神氏のこの説が出てから、これに異を唱える論文は見当たらず、ひとまず定説とみなされていたようである。

それ以前、昭和四十九年に柳瀬万里氏[2]は、一連の研究で『古今集注』『袖中抄』『顕注密勘』の顕注と、作者未詳の『古今秘註抄』『毘沙門堂註』が引用する顕昭注を比較した後、『顕注密勘』の「顕昭註は、『古今集注』『袖中抄』と、ほぼ一致するものである。」「しかし、この二書がそのままに顕昭註として記されているのではない。同書の顕昭の註は、『古今集注』『袖中抄』をふまえて、それらをのり越えるかたちで成立したものである。」とまとめられている。

かつて稿[3]者は、一〇〇九番歌の顕注に建仁元年（一二〇一）三月の新宮撰歌合の釈阿詠についての記述が見られることと、『奥義抄』『古今集注』には加注されていない顕注独自の四十首の注の中に建久から建仁頃（一一九〇～一二〇三）に同時代の歌人たちの間で注目された歌語が取り上げられていて、その中に千五百番歌合での体験が反映していると思われるものがあることから、顕注の成立時期は、建仁元年三月『新宮撰歌合』以降、おそらく建仁三年の『千五百番歌合』以降であると述べた。

それに対し、鎌田智恵氏[4]は「『顕注密勘』の顕昭注―『古今秘注抄』『古今集注』との関係について―」の中で、「『千五百番歌合』との関係については、同歌合に当時の歌壇の関心・傾向が反映されており、それ故に顕注で新たに注が付された歌語と

の共通性を指摘しうるという程度の理解に留めるのが穏当であろう。したがって顕注成立の上限は、あくまでも『新宮撰歌合』のあった建仁元年（一二〇一）三月以降とみておくべきである。」とおっしゃるが、御本人が「反証があるわけではない」とおっしゃるように、鎌田氏の方から論拠は提示されていない。また鎌田氏の「『顕注密勘』の顕昭注（続）―注釈の性格と目的について―」[5]でも「前稿で詳しく論じたように、論者は新田氏の論を一部修正して、顕注の成立を集注より後の建仁元年（一二〇一）三月以降とみている。」とおっしゃるが、鎌田氏が一部修正なさったとおっしゃる、その具体的な論拠は述べられていない。

注(3)拙稿において、顕注の成立年代をおそらく建仁三年の『千五百番歌合』以降であろうと述べた理由は、拙稿に引用しきれなかったが、『奥義抄』と顕昭『古今集注』（以下、本稿では単に『古今集注』と呼ぶ）には注がないのに「顕注」で新たに注が付された歌語の用例が『千五百番歌合』に数多く見られたからである。

しかし「数」ではなく、定家たちがその歌語を「いつ」[6]使用したか、に注目すると、注(3)拙稿で触れたように建久年間や『正治初度百首』『正治後度百首』など、成立年代上限の建仁元年を遡る例も複数見られる。そのため顕昭が次に書く歌学書で追加するべき項目について、おそらく建久年間頃から考えていただろうと推測できる。稿者としては、これらを論拠に、成立年代を『千五百番歌合』から遡る方向で考えてみたい。

注(3)拙稿執筆当時は、三代集時代に詠まれた後『千五百番歌合』まで用例が見られない例があることが気に掛かっていた。「顕注」の成立を『千五百番歌合』以前とすると、あたかも顕昭を予言者のように扱っているようで、成立年代上限に近づける勇気が出なかったからである。そこで慎重を期し、『千五百番歌合』以降と述べた。

ここ数年、稿者は[7][8]「顕注」と『和歌色葉』の関わりを探ってきた。注(7)拙稿において、「顕注」に見られる顕昭説が『和歌色葉』に見られる一方、顕昭が『和歌色葉』の記述を意識して「顕注」を執筆したと見られる例があることを指摘した。顕昭が『和歌色葉』[9]を閲覧したのはおそらく建久九年（一一九八）である。『和歌色葉』との関わりから、注(7)拙稿執筆当時、顕注の成立年代を、より『和歌色葉』閲覧時である建久九年に近づける―かつて注(3)拙稿で述べた建仁三年『千五百番歌合』以降とするより、成立年代上限の建仁元年三月に近づけることはできないかと考え始めていた。

そこで本稿では、顕注成立時期の顕昭の意識を探るため、注(3)拙稿では省略した『奥義抄』『古今集注』には注がなく顕注で新たに注が付された歌をできるだけ多く検討し、その歌に顕注が加えられた理由を考えていきたい。

このうち、八〇七「われから」は注(7)拙稿で、五九「あしひき」四八七「ちはやぶる」六七九「石上布留」は注(8)拙稿で検討を加えたので、本稿では省略する。

以下、本稿では、顕注・密勘・『奥義抄』・『古今集注』で加注された古今集歌とその注の歌番号は漢数字を、それ以外の歌番号は算用数字を使用した。

一、顕注の内容と重なる注が、ほかの歌の『奥義抄』『古今集注』に見られるもの

先ほど『奥義抄』『古今集注』には注がなく顕注で新たに注が付された歌を検討の対象にするとしたが、顕注で新たに注が付された歌そのものの注は存在しないが、顕注の内容と重なる注が『奥義抄』『古今集注』では別の歌の注に見られる例があるので、まずここから確認していきたい。

A、四(10)一「あやなし」

［顕注］　四一

春の夜の闇はあやなし梅花色こそみえね香やはかくる、

あやなしとは、やくなしと云詞也。

香をとめてたれをらざらむ梅のはなあやなし霞たちなかくしそ

又よしなしと云詞とも覚たり。又あやなといふ詞は、あやなしと云詞の、し文字を略したるともみえたり。此集に

山吹はあやなな咲そ花みむと植けむ人のかよひこなくに

拾遺に

身にかへてあやなく花を惜む哉いけらば後の春もこそあれ

又あやなといふ詞有。それはあやにくといふ詞とみえたり。後撰

くれはとりあやに恋しく有しかば二村山はこえず成にき

「あやなし」の説明は『奥義抄』六二九にあり、六二九番歌は顕注にもある。

［奥義抄］　六二九　あやなくて

あやなくてまだき無名のたつた河わたらでやまん物ならなくに

あやなしとは、あぢきなしといふ事とぞ見えたる。拾遺にも

香をとめてたれをらざらん梅花あやなし霞立なかくしそ

と読り。又兼盛歌云

ゑひにける我らはしらずあやもなしたがかづけたるつみにかあるらん

［顕注］　六二九

あやなくてまだきなき名の立田河渡らでやまむ物ならなくに

あやなくてとは、あぢきなしと云事ともみえたり。或は益なしとも釈したり。よしなしとも云心也。春の夜のやみはあやなしともよみ、山ぶきはあやなゝさきそともよめり。あやなく霞たちなかくしそともよめり。皆同心也。又兼盛歌には

ゑひにけるわれらはしらずあやもなしたがかづけけるつみにか有らん

是も同詞歟。

『奥義抄』六二九の傍線部「あやなしとは、あぢきなしといふ事とぞ見えたる。」「又兼盛歌云」以下一首引用は顕注六二九の傍線部にそのまま見られ、点線部の歌も下句が引用されている。その一方、顕注六二九の二重傍線部「益なし」「よしなし」

「春の夜のやみはあやなし」「山ぶきはあやなゝさきそ」は『奥義抄』にはないが、「春の夜のやみはあやなし」と引用された四一番歌の顕注に見られる。しかし顕注四一に「あぢきなし」はない。これは四一番歌の「あやなし」には「あぢきなし」より「やくなし」「よしなし」のほうがふさわしいと考えて、新たに書き加えたのではないだろうか。顕注六二九に『奥義抄』と同じ内容と顕注四一の内容を記した後に「皆同心也」「是も同詞歟」とあるように、大きな違いはないと捉えていたと思われるが、顕注四一に新たに注が付されたのは、「あやなし」について顕昭が考察を深めた結果であると考える。

B、九〇八「高砂の尾上」

顕注九〇八は「高砂の尾上」ついてだが、「高砂の尾上」の説明は『古今集注』二一八に「たかさごとは山の惣名也。砂積て成山心なり。をのへとは山の尾の上と云也。」「はりまのたかさごは郡の名也。をのへと云へるは里の名也。その所のはまづらに、松のひときたてるをよみそめてよめるなり」と二通りの説明がある。

[古今集注]　二一八
あきはぎのはなさきにけりたかさごのをのへのしかはいまやなくらむ
　たかさごとは山の惣名也。砂積て成山心なり。をのへとは山の尾の上と云也。素性が花山にて詠ずる歌にいはく、
　山もりはいはゞいはなむたかさごのをのへのさくらをりてかざゝむ
　此歌或本には、山にてよむとあり。山はひえの山なり。いかさまにも播磨の高砂と云所にあらず。これのみならず、たかさごのをのへのさくら、たかさごのをのへの松、たかさごのをのへのしかなどよめる歌多し。皆よろづのやまにかよひてよめり。俊頼朝臣の、松もや我をともとみるらむともよみ、をのへの松と我となりけりとよむは、彼播磨国のたかさごにて読也。はりまのたかさごは郡の名也。をのへと云へるは里の名也。その所のはまづらに、松のひときたてるをよみそめてよめるなり。此素性が花山の歌は、おほかたの山の名なれば無相違云々。今案に、古今の
　かくしつゝよをやつくさむたかさごのをのへにたてる松ならなくに
又興風歌の
　たれをかもしる人にせむたかさごの松もむかしのともならなくに
又貫之集の
　いたづらによにふるものとたかさごの松もわれをやともとみるらむ
　此歌等もはりまの高砂の松歟。又考、後拾遺のみのいたづらになりぬることをおもひなげきつゝはりまにたび〳〵かよひはべりけるに、たかさごの松をみて、藤原義定
　われのみとおもひこしかどたかさごのをのへの松もまだゝてりけり
〈中略〉又松は惣にも別にもわたるべし。鹿・桜などは播磨

とさしがたくや。

顕注二一八では「高砂の尾上とよめるにつきて、二の様有。」と述べ「一には、播磨に高砂と云所にをのへのさとゝ云所有。彼浜づらに松有。是高砂の尾上の松とよめり。」「又高砂とは山の惣名也。いさごつもりて山となる心也。山にはをと云所あれば、山の尾のうへといふは、みねを云也。」と『古今集注』二一八の説明を要領よくまとめている。

［顕注］　二一八

秋萩の花咲にけり高砂の尾上の鹿も今や啼らん

大かたの歌のすがた、萩をば鹿鳴草と云て、しか鳴てはなさくといへば、かくよめる也。高砂の尾上とよめるにつきて、二の様有。一には、播磨に高砂と云所にをのへのさとゝ云所有。彼浜づらに松有。是高砂の尾上の松とよめり。後拾遺藤原義定播磨へくだりてよめる

我のみと思こしかど高砂の尾上の松もまだたてりけり

又高砂とは山の惣名也。いさごつもりて山となる心也。山にはをと云所あれば、山の尾のうへといふは、みねを云也。素性、花山と云所にて、たかさごのをのへの桜おりてかざさんとよめるは、惣の山也。尾上の松といふ事は、はりまの高砂にてもよめり。又をしなべて外の山にてもよみたれば、まぎれぬべし。ことに随て心えてよむべし。

それに対し、顕注九〇八は「是は播磨の高砂にをのへの里と云所の浜に松のあるを、高砂の尾上の松と云。惣じて山を高砂といひ、をのうへを尾上と云にはあらず。」と九〇八の「高砂」は播磨国の地名であると述べる。

［顕注］　九〇八

かくしつゝ世をやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに

是は播磨の高砂にをのへの里と云所の浜に松のあるを、高砂の尾上の松と云。惣じて山を高砂といひ、をのうへを尾上と云にはあらず。歌に従ておもひわくべし。やがて下に

誰をかも知人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

此歌も同事也。

これは「高砂の尾上」に二通りあるため、『古今集注』二一八では地名の例として引用した九〇八番歌に、新たに注を付したと考えられる。

C、一〇八一「鶯の笠にぬふてふ梅花」と「かたいと」「よる」

一〇八一番歌は『奥義抄』三六に引用されている。顕注三六は『奥義抄』三六そのままである。

［奥義抄］　三六　うぐひすのかさ

鶯のかさにぬふてふ梅の花折てかざゝむ老かくるやと

是は催馬楽に

青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花かさ

といふ歌を本にて読るなり。此歌は此集の第二十巻にもあ

り。よめる心は、鳥の木しげき枝に木つたひありくをば、ぬふといふ也。さればぬふと云詞に付て、笠をばぬふ物なれば柳のいとして梅の花笠をぬはせたるなり。

［顕注］　三六

鶯の笠にぬふてふ梅花折てかざゝむ老かくるやと

是は催馬楽に

青柳をかた糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅花笠

と云歌を本にてよめる也。此歌は此集の第二十巻にも有。よめる心は、鳥のこしげき枝に木づたひありくをば、ぬふといふなり。されば、ぬふと云詞につきて、笠をばぬふ物なれば柳糸して梅花笠をぬはせたる也。

これに対し、顕注一〇八一では「かたいとによる」に注目する。

［顕注］　一〇八一

青柳をかた糸によりて鶯のぬふといふ笠は梅のはな笠

此は催馬楽の青柳の歌也。此集の春部に此歌を本にてよめる歌の所に委注畢。但、　かれは青柳をかた糸によりてと云、初の二の句ははべらず。かたいとによるとは、いとはふたすぢをあはせてよるに、一すぢをばかたいと、いふ。そのかたいとをつよからむれうによりまろめんずる也。たとへば紙なはと、かみひねりとの定也。

「かたいと」「よる」例は、『古今集』の

かたいとをこなたかなたによりかけてあはずはなにをたまのをにせむ

（古今集483・読人しらず）

以降、後撰集・忠岑集・順集・大斎院前御集・公任集などに見られるものの、その後しばらく用例が見当たらないが、『正治初度百首』の定家詠と『千五百番歌合』の良経詠に見られる。

かたいとをよるよるみねにともすひにあはずは鹿の身をもかへじを

（正治初度百首1335・定家）

くりかへしたのめてもなほあふことのかたいとをやはたまのをにせん

（千五百番歌合2492・良経）

［顕昭判］左歌、かたいとをこなたかなたによりかけてあはずはなにをたまのをにせん、と侍る歌にて、ひとふしをかしくむすびなされて侍る歟

顕昭の判に引用された古今集483は『奥義抄』・『古今集注』・顕注のいずれにもないが、これら近い時代の「かたいと」を「よる」用例が、『奥義抄』三六の「鶯のぬふ」の注に加えて「かたいとによる」の注を一〇八一に新たに加えたきっかけになったのではないだろうか。

D、四九五「思ひ出るときはの山」と「岩つゝじいは」

顕注四九五は「思ひ出るときはの山のいはつつじ」の注である。

［顕注］　四九五

思ひ出るときはの山の岩つゝじいはねばこそあれ恋しき物を

おもひ出る時はといはむとて、ときはの山といへり。いは

ねばといはむとて、岩つゝじと置り。是はふたやうにそふるやう也。

「思ひ出るときはの山」の注は『古今集注』[11]一四八にある。顕注一四八では『古今集注』後半の「平仲が歌」説を検討したところを削除し、前半のみをまとめていて、そのなかの「おもひ出るときはの山」の説明は、顕注四九五とほぼ同じ内容である。

［顕注］　一四八

おもひ出るときはの山の郭公から紅にふりいでゝぞ鳴

思いづる[12]時はと云詞を、思出るときはの山のと、そへよめるなり。から紅のふりでゝぞなくとは、紅のふりでといふ事のあれば、そへてよむ也。或人云、ふりでとは、紅のこき色也。常には紅をおろして白布にそめたるをば、ふりでといふ。それをおろして又そむる也。されば、くれなゐのふりでとはよむとぞ申。そのふりでをうちまかせてはふでと申せば、ふみかく筆にも詞のかよへば、そへよむ也。　ふりでをも筆[13]と云、ふむでをもふでといへば、おなじ詞にかよふ也。此歌に付ては、ものがたりあれど、たしかならねば書しるさず。

顕注四九五の特徴は「いはねばといはむとて、岩つゝじと置り」と「いはつつじいは」の注である。「いはつつじいは」の用例は『古今和歌六帖・落窪物語・和泉式部集・伊勢大輔集・江帥集・為忠初度百首（頼政）・月詣和歌集（頼円法師）・高倉院昇霞記・長方集など後撰集以降千載集のころまで散見する。近い時期には『正治初度百首』の式子内親王と『千五百番歌合』の有家に用例がある。

あふ事はとほつのはまのいはつつじいはでやくちんそむる心を　（正治初度百首280・式子内親王）

わぎもこがくれなゐぞめのいはつつじいはでちしほの色ぞ見えける　（千五百番歌合560・有家）

四九五も一〇八一の「かたいと」「よる」同様、こうしたごく近い時期の用例が、顕注で新たに加注するきっかけになったのではないだろうか。

E、一七一「わがせこ」と「わぎもこ」

顕注一七一は「わがせこ」の注だが、「わがせこ」については[14]二五の『古今集注』・顕注と内容は共通する。

［顕注］　一七一

我せこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋の初風

わがせことは、をとこにも女にもわたる歟。此歌にては妻をいふときこゆ。さればこそ衣のすそを吹かへさせて、うらめづらしともいへば、男のきぬのすそ吹かへすとはいふべからず。又此歌わぎもこがとかける本もあれど、証本皆我せこと有。万葉赤人歌、

我せこにみせむと思ひし梅花それともみえず雪のふれゝば

此歌も女ときこえたり。ふるき髄脳には、男をば、せこ、わがせこ、せな、せ、妻をば、いも、わぎもことかきたれど、

女男にかよひてよめり。女をいもといひ、男をせなといふにより て、女男をいもせといふは、ひとつの様也。又いもうとせうとをもいもせといへり。

顕注一七一の特徴は「又此歌わぎもこがとかける本もあれど、証本皆我せこと有。」と本文の違いに言及している点である。久曾神昇氏[15]の『古今和歌集成立論』では一七一番歌に「わぎもこ」という本文は確認できなかったが、一七一番歌を「わぎもこ」と書く異本の存在が、顕注二五で注を加えた「わがせこ」をもつ一七一番歌に対し、新たに注を加えたきっかけになったのかもしれない。

F、一〇二「ちぐさ」

顕注一〇二は『古今集注』一〇一と同じ記述の顕注一〇一を補う意図があったと考える。

［顕注］　一〇二

春霞色の千種にみえつるたなびく山の花の陰かも

ちぐさ、同事也。ちぐさとは千種也。千草にはあらず。やちぐさとは八千種也。ちぐさの花とは様々の木草の花を、ちぐさともやちぐさとも云也。物のおほかる数には、やへともいひ、年の久しきをば、やそとも、八千世ともいふなり。

先ほど顕注二五に『古今集注』二五と同様「わがせこ」の注があるにもかかわらず、新たに顕注一七一に加注したのは、異なる本文の存在がきっかけになったのかもしれないと述べたが、密勘が指摘するように、一〇一番歌こそ大きく二つの本文が対立している。

［顕注］　一〇一　※『古今集注』[16]と同じ内容

桜花ちぐさながらにあだなれど誰かは春を恨はてたる

千種とは、様々の物をぞ常にはよめど、桜一つにとりても、かれこれをちぐさとよみたる也。

［密勘］　一〇一

家本には、さく花はとかきたるうへは不及不審。なにの証本をももちひず。家説はことはりのかなひ、歌の聞よき説を執し侍也。但、かの崇徳院御本と聞ゆるにも、墨はさく花と書て朱にはさくらはなとつけたり。朱は僻事歟。

一〇一番歌の本文をめぐっては浅田徹氏[17]に密勘の「かの崇徳院御本と聞ゆるにも」以降について詳細な検討があり、上野順子氏[18]は新院御本の位置付けを確認なさるなかで「新院御本の本文に拠り、初句に「桜花」の本文を採用し、その結果、「さくらひとつにとりても、かれこれちくさとよみたるなり」という解釈からも明らかなように歌全体の文脈に無理を生じている。」と顕注一〇一の本文の非合理性を指摘なさっている。

おそらく顕昭も一〇一番歌の本文が「桜花」では非合理であることは承知のうえで、それゆえ顕注一〇一の説明ではもの足りないと考え、おなじ「ちぐさ」を使用した一〇二番歌で「ちぐさ」の説明を追加したのではないだろうか。

顕注の内容と重なる注が『奥義抄』『古今集注』では別の歌の注に見られる例について検討した結果、以下のようにまとめることができる。

1当該歌語について、顕昭の考察が深まったため：四一

2一般名詞と地名を区別したため：九〇八

3『正治初度百首』など近い時期に用例があるもの：一〇八

一・四九五

4古今集本文の異同に関わるかと思われるもの：一七一・一〇二

二、本文の異同に注目したもの

さて、前章で顕注の内容と重なる注が『奥義抄』『古今集注』では別の歌の注に見られる歌について、顕注で新たに注を付けた理由を探ってきた。それをもとに『奥義抄』『古今集注』にはなかったのに、顕注で注が付けられた歌について検討していきたい。

まず、前章最後で触れた古今集本文の異同に関わるかと思われるもの。[19]

㈠顕注に密勘・僻案抄が賛同するもの

顕注では一一一番歌「駒なべて」に対し「駒なめてとも書り」と本文異同を指摘する。[20]

［顕注］　一一一

駒なべていざみにゆかむ故郷は雪とのみこそ花は散らめ

駒なべてとは、駒をならべてと云也。駒なめてとも書り。万葉集には、駒並とかけり。こまをならべて行心也。

これに対し、定家は密勘でも『僻案抄』でも同意している。

［密勘］　一一一

こまなべて、同。

［僻案抄］　一一一

こまなべていざみにゆかむ故郷は雪とのみこそ花はちるらめ

こまなべては、ならべて也。うちつれたるよし也。なめてともかく、同事也。

㈡顕注と密勘が対立するもの

一方、三六七・一〇六七・一一〇〇では顕注と密勘が対立している。[21]

A、一一〇〇「かもの祭」と「かもの社」

［顕注］　一一〇〇

千早振かものまつりの姫小松万代ふとも色よかはらじ

これは冬のかもの祭の歌也。寛平御時、始て賀茂の臨時のまつりたち侍し時の歌也。賀茂の祭のひめこ松とよめる事、いみじ。これを本にてよむべき也。色はかはらじとあらで、色よとをけるも、めでたし。

［密勘］　一一〇〇

これは例の証本の字の他本にかはる事おの〳〵のおもふ所あれば、かもの社‖の姫小松よろづ代ふとも色はかはらじとて侍べし。よの字めでたしとは、みえ侍らず。後みむ人は、これを只このみ〳〵にしたがひ給ふべし。

顕注に「賀茂の祭のひめこ松とよめる事、いみじ。これを本にてよむべき也。」とあるが、密勘で「かもの社の姫小松よろづ代ふとも色はかはらじとて侍べし。」とあるので本文状況を確認した。顕注の「まつり」は元永本・関戸本・六条家本・寛親本・永治本・前田本・天理本・顕昭『古今集注』。後鳥羽院本では「やしろ」に「まつり本」と傍記、寂恵本では「やしろ」に「マツリ清」と傍記がある。それ以外の本（永暦本・建久本・伊達本など）は「やしろ」である。顕注では「やしろ」に言及していないが、おそらく顕昭は「まつり」「やしろ」二通りの本文を知っていて、そのうえで「まつり」を是とし「いみじ」と述べ「これを本にてよむべき也。」と述べたのではないだろうか。

顕注に「色はかはらじとあらで、色よとをけるも、めでたし。」とあるが、本文状況を確認すると「いろよ」という本文を持つのは前田本のみで、他の本は「いろは」である。おそらく顕昭は「いろはかはらじ」という本文も知っていたが、この本の本文が「色よ」であることを「めでたし」と述べたのだろう。

実は一一〇〇は『古今集注』に存在するが、『古今集注』は教長注批判のみで内容が全く異なるので取り上げた。『古今集注』とは異なる注を書いたきっかけは、以上のような本文の相違に注目したからではないだろうか。

B、一一〇六七「ましこ」と「ましら」

［顕注］　一〇六七

わびしらにまし(22)こな鳴そ足曳の山のかひあるけふにやあらぬ

ましこは猿也。ましとぞ常には申せど、此本にはましこと有。小鳥のなかにこそ、てりぬるてりましこなどいひて侍れ。其の鳥の名にもまぎるゝ歟。猿叫巴峡と云題なり。

［密勘］　一〇六七

猿叫峡題を詠て四条大納言入朗詠猿部。惣此本の字、多有相違。他本尤ましらを可用歟。

顕注に「ましとぞ常には申せど、此本にはましこと有。」とあるが、「ましはなゝきそ」は基俊本・筋切本・元永本、「此本」と同じ「ましこなゝきそ」は前田本・天理本・『袖中抄』。それ以外の本は密勘の「ましら」である。一〇六七も本文の異同に注目して、顕注で書き入れたかと思われるが、「此本」の本文「ましこ」は「小鳥のなかにこそ、てりぬるてりましこなどいひて侍れ。其の鳥の名にもまぎるゝ歟」と説明するように、鳥の名でもあった。

鳥の「ましこ」は仲正に例がある。

昔を思ふといふことを　　源仲正

ましこゐるゐのくづちはらうちはらひみきはかたてし昔こひしも

（夫木抄12895・増子鳥）

題注に書かれた「てりましこ」は、建久二年の十題百首で寂蓮に、『正治初度百首』で惟明親王によって詠まれている。

十題百首　寂蓮法師

時雨こし木ずゑの色を思へとやえだにもきゐるてりましこかな　（夫木抄12896・増子鳥）

鳥　惟明親王

冬枯の木ずゑにきゐるてりましこ紅葉にかへるよそめなりけり　（正治初度百首195・鳥）

こうした近い時代の「てりましこ」の例が、「ましこ」の注に「てりましこ」を書き入れるきっかけになったのかもしれない。

三、新古今時代に用例が見られるもの

次に、この「てりましこ」や、一章で指摘した一〇八一「かたいと」「よる」・四九五「岩つゝじいは」のように、題注成立と近い時期に用例が見られるものについて検討していきたい。

A、二七二「吹上」

題注二七二「吹上」は、先ほどの「高砂」のように、一般名詞もあるため、地名を説明したのかもしれない。

［題注］二七二

秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

吹上とは、ふきあげの浜をよめり。紀伊国に和歌浦、吹上浜有。それをわか、ふきあげといひならべたり。寛平御時菊合に吹上浜のかたをすはまに作りて菊栽たりけるを、菅丞相のあそばしたりける也。吹上浜とは、風のいたく吹て浜の真砂を吹上るをおもしろきとぞ申。

題注二七二は「吹上」について二七二番歌の詞書「おなじ御時せられけるきくあはせに、すはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりけるうた、ふきあげのはまのかたにきくうゑたりけるによめる」に基づいた説明ののち、吹上浜の様子を具体的に述べている。

「吹上」は「浜」を伴って紀伊国吹上浜を詠むものが多い。その一方、数は少ないが紀伊国吹上浜以外の「吹上」の歌がある。

たにがはのふきあげにたてる玉柳えだのいとまもみえぬはるかな　（金葉集初度本38・読人不知）

浦風の吹上にたてるすずしさに秋かとぞ思ふ志賀のからさき　（頼政集158・水風似秋）

頼政詠は「志賀のからさき」とあるので紀伊国吹上浜ではなく、風が吹き上げるところという一般名詞であることは明白である。金葉集の例も「たにがは」とあるので、おそらく紀伊国吹上浜以外、一般名詞であろう。

治承二年の別雷社歌合で「谷風の吹上にさける」と「高円のやま」を詠んだ歌に対し、釈阿は判で紀伊国の吹上浜を持ち出している。

谷風の吹上にさける花みれば雲立ちのぼる高円のやま　（別雷社歌合75・花・実守）

［釈阿判］左、雲たちのぼるといへる末の句いとよろしくみえ侍り、吹上にさけるといへるや、ふき上の浜などやうなる所のあらんやうにきこゆらん、

このことから「吹上」と言えば紀伊国吹上浜を思い浮かべるものだったことがうかがわれる。この「谷風の吹上にさける」を、『千五百番歌合』で定家が使用している。

たにかぜのふきあげにさけるむめの花あまつ空なる雲やにほはむ　（千五百番歌合160・定家）

以上、数が少ないが、顕昭と同時代に一般名詞「吹上」の例が見られることから、これまで当たり前のように詠まれてきた紀伊国吹上浜について、具体的な説明を加えたのではないかと思われる。

あるいは忠盛集に「くまのへまゐらせ給ふ」とあるように、または熊野懐紙[23]に見られるように、この時代の熊野参詣の流行の影響から、「吹上」の注を書き入れたのかもしれない。

はるかぜのふきあげにたてる花ざくらなにのあかぬになみのをるらん

のへまゐらせ給ふとてふきあげのはまを御らんじて（忠盛集100「くま）

ふぢしろのみさかのそこをながむればなみのはなちるふきあげのはま

（熊野懐紙55・正治二年十二月・通親）

B、二三「霞の衣」「ぬきをうすみ」

［顕注］　二三

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

霞の衣とは、かすみの立わたるを衣にたとへたり。雲の衣ともよめり。同事也。ぬきをうすみとは、もろ〳〵のおる物には、きぬにも布にも、たてぬきとて、ながきをばたてと云、よこざまにみじかきをばぬきと云。其ぬきの薄きをば、よはき事にいひならはしたれば、ぬきのうすくてみだるゝ由也。

顕注二三は「霞の衣」「ぬきをうすみ」の注である。「霞の衣」については小林一彦氏[24][25]に詳細な論文があり、そのなかで「「霞の衣」という表現がいちはやく『古今集』に見えていながら、その後は空白期が存し、新古今前後から爆発的に詠作されるようになることを指摘」されている。

「ぬきをうすみ」には次の例がある。

一重なるあさの衣のぬきをうすみ折しりがほに人やみるらん　（御室五十首765・夏七首・生蓮）

当時の「霞の衣」の流行に加え、この「ぬきをうすみ」の歌も、二三に注を加えるきっかけになったのではないだろうか。

C、一六九「さやかに」

顕注一六九は「めにはさやかに」の「さやか」の注である。

［顕注］　一六九

秋来ぬとめにはさやかにみえねども風の音にぞおどろかれぬる

目にはさやかにとは、あざやかにと云也。それを略してさ

やかにと云。或はさだかにと云詞をさやかにと云歟。

「めにはさやかに」は『千載集』の守覚法親王が使用したのち、

あさぢふの露けくもあるか秋きぬとめにはさやかにみえけるものを　（千載集227・守覚法親王）

建久元年に慈円が「めにさやかなる」と詠み、

秋きぬとおどろく風をたづぬればめにさやかなる萩のうは葉を　（拾玉集1154・勅句百首・秋三十首）

『千五百番歌合』で定家が「めにもさやかに」と詠んでいる。

冬きぬとしぐれのおとにおどろけばめにもさやかにはるるこのもと　（千五百番歌合1707・定家）

D、五一五「ひもゆふぐれ」

［題注］　五一五

唐衣日も夕暮になる時はかへす〳〵ぞ人はこひしき

きぬにはひも有。ひもはゆふ物なれば、ひもゆふ暮とそへたり。

「ひもゆふぐれ」は平安時代の用例[26]は少ないが『新古今集』[27]に264（清輔）・284（貫之）・650（通光）・952（定家）と、四首も入集している。

このうち定家詠は『拾遺愚草』の詞書から正治元年冬左大臣家十首歌合の詠である。さらに定家は内裏名所百首と建保院百首でも「ひもゆふぐれ」を使用していて定家好みの歌語であったようである。また『千五百番歌合』では家隆の例がある。

から衣ひもゆふぐれのそらのいろくもらばくもれまつ人もなし　（千五百番歌合2385・家隆）

こうした当時の歌人たちの好みから、五一五に注を付けたのではないだろうか。

E、一〇四五「野飼」

［題注］　一〇四五

いとはるゝ我身は春の駒なれや野飼がてらにはなち捨たる

馬をも牛をもはなちかふを野飼と云也。それによせて人をおもひはなつをも、のがふと云也。

「野飼」は後撰集と後拾遺集に二例見られ、好忠集・重之子僧集・和泉式部集・相模集・堀河百首（顕季）・永久百首（俊頼）・続詞花集・俊成五社百首など、後撰集以降新古今時代まで用例が散見する。近い時期としては『六百番歌合』『正治初度百首』『正治後度百首』に次の例がある。

夏ぐさに野がひのこまもかくろへていばゆるこゑぞ人にしらるる　（六百番歌合196・夏草・家房）

里ちかく山路の末は成りにけり野がひの牛の子を思ふ声　（正治初度百首1687・生蓮）

山がつののがひのみちになれにけりおのが心とかへるはるごま　（正治後度百首665・暮・長明）

F、一〇七五「霜やたび」

頭注一〇七五は「霜やたび」の注と「たち[28]さかゆべき神のきね」の説明である。

［頭注］　一〇七五
霜やたびおけどかれせぬ榊葉のたちさかゆべき神のきねかも
　霜やたびおけどかれせぬとは、しものしげくおけどさかき葉のかれせぬ心也。しげくおほかる事には、やへ、やたび、やそなどよみならはしたり。榊葉には巫女は常にはなければ、やをとめとて八人の巫女相具したり。石清水の榊葉にもあり。たちさかゆべき神のきねは、さかきによせて立さかゆと、神をいはひける也。

「霜やたび」は伊勢大輔集・基俊集に見られる程度だったが、慈円に建久二年の十題百首と『正治後度百首』、良経の西洞隠士百首に用例が見られる。

冬くれどさびしくもなし霜やたびおけどもかれぬ竹をともにて　（拾玉集962・十題百首・竹）
霜やたびおけどもかれぬ竹のふしのかためてけりな君がちとせは　（正治後度百首1096・祝言・慈円）
しもやたびおきにけらしもかみがきやみむろのやまにとれるさかきば　（秋篠月清集677・西洞隠士百首）

G、九一〇「おきつしほあひ」

［頭注］　九一〇
渡つ海のおきつ塩あひに浮ぶ泡の消ぬ物からよるかたもなし
　おきつしほあひとは、沖に塩のみちあふ所也。

「おきつしほあひ」は用例が少ない。

和歌の浦やおきつしほあひにうかび出づる哀わが身のよるべ知らせよ　（新古今集1761・家隆朝臣）

この建永元年（一二〇六）の家隆詠以前は、次の松浦宮物語の例しか見当たらないが、

わたの原おきつしほあひにうかぶあわをともなふ舟のゆくへしらずも　（松浦宮物語21・少将（橘氏忠））

「しほあひ」は以下の例がある。

あなしふくせとのしほあひにふなでしてはやくぞすぐるさやかた山を　（後拾遺集532・通俊）
おほしまやせとのしほあひをこぐふねのかぢとりあへぬ恋をするかな　（恵慶法師集254）
和田つ海のおもひしふかき塩あひはけさたちかへる涙なりけり　（久安百首74・崇徳院）
さらぬだにをふのうらなしかげよきに夕しほあひの風ぞたちぬる　（覚綱集12）

後拾遺集532は『袖中抄』第二十「ひかた」のなかの「あなし」の用例として引用されているが「しほあひ」の説明はない。近い時期としては『正治後度百首』に例がある。

ふたみがた松吹く風に雲きえて月のかげみつ塩あひのはま
（正治後度百首977・かいへん・越前）

この「しほあひ」の歌なども九一〇番歌の「おきつしほあひ」を意識させるきっかけになったのではないだろうか。

H、二六九「久方の雲上」「あまつ星」「あやまたる」

［顕注］二六九

久方の雲の上にてみる菊は天つ星とぞあやまたれける

久堅の雲上とは、大内也。久かたの空といへば、空の雲によそへたり。雲の上とは、殿上もわきていふ。されば、殿上人をば雲のうへ人とよむ也。あまつ星とは、空の星といふ也。天津とは、やすめ字をそへたり。あやまたるとは、みあやまつ也。みたがふる心也。

「あやまたる」は古今集に四例・後撰集一例・拾遺集三例・後拾遺集四例など、古今集から後拾遺集の頃を中心に用例が見られ、その後も散見する。近い時期には、良経に「あやまつ」の用例が見られる。

くもりなきほしのひかりをあふぎてもあやまたぬみをなほぞうたがふ
（秋篠月清集692・西洞隠士百首）

「あまつ星」は拾遺集の道真詠に見られるほか兼輔集・能宣集・朝光集・長能集・相模集・栄花物語・久安百首（顕輔）・出観集・小侍従集など平安時代中期以降用例が散見する。近い時期には、『正治初度百首』に惟明親王の例が見られる。

いく千世とかぞへもやらぬ君が代のたぐひにみゆるあまつほしかな
（正治初度百首200・惟明親王）

歌語「雲の上」は勅撰集だけでも、古今集にもう一例・後撰集二例・拾遺集二例・後拾遺集四例・金葉集三例・詞花集二例・千載集三例・新古今集三例と、一貫して数多く詠まれている。一方「久方の雲上」は『千五百番歌合』の良平詠まで用例[29]が見当たらない。

ひさかたの雲のうへなるさくらばなそらにしらるるゆきとこそ見れ
（千五百番歌合355・良平）

I、九七五「やへむぐら」「門さす」「てへ」

［顕注］九七五

今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらしてかどさせりてへ

やへむぐらとは、むぐらのふかきをやへむぐらとはいふ也。又葎のやへとも云也。門さすとは、かどにおひふたがる心也。門させりてへとは、いへと云詞を略したる也。まてといはゞを待てはゞともよめり。

「やへむぐら」の用例多数あり九七五番歌同様「さす」と詠まれた例もある。

やへむぐらさしてし門を今更に何にくやしくあけてまちけん
（後撰集1055・よみ人しらず）

やへむぐらさしこもりにしよもぎふにいかでか秋のわけてきつらん
（千載集229・皇太后宮大夫俊成）

「門さす」は、古今集にほかに二例見られる。

おいらくのこむとしりせばかどさしてなしとこたへてあは

ざらましを　（古今集895・よみ人しらず）
うき世にはかどさせりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする　（古今集964・平さだふん）
古今集九七五・964同様「かどさせり」と詠む歌が数例見られる。
中中に雲ゐの月のみざりせばかどさせりともさはらざらまし　（和泉式部続集400「物忌にてある所に、月のあかき夜、人のきたるに、えあはで云ひいだす」）
浮世には門させりとやおもふらん出でがてにするしののをすすき　（長秋詠草141・述懐百首・薄）
「門さす」は、承安二年（一一七二）の「暮春白河尚歯会和歌」の清輔詠に「かどさして」の例が見られ、
おいらくのこんとしりせば門さしてなしとこたへてあはざらましを　（暮春白河尚歯会和歌21「又清輔誦ず」）
建仁元年四月に後鳥羽院が、三句目「まつのかど」四句目「さしもつれなき」と二句に亘るが、「かどさし」を詠み、『千五百番歌合』では家長が「まつのかど」「ささでぞあくる」と、同様に二句に亘るが「かどささ」を詠んでいる。
はれゆかん程をしいまは松のかどさしもつれなき五月雨の雲　（後鳥羽院御集1540「同日（建仁元年四月卅日）当座御会」山家五月雨）
いたづらにたのめぬ人をまつのかどささでぞあくるいくよともなく　（千五百番歌合2335・家長）

「てへ」は古今集に、もう一例あり、拾遺集に二例（天暦御製・よみ人しらず）・陽成院歌合・元良親王集・平中物語・大和物語・宇津保物語・恵慶法師集・時明集・拾遺抄（藤原長能）にあるが、その後見られず、顕注執筆当時には、なじみの薄い歌語になっていたので注を付けたのではないだろうか。

J、四〇一「そぼちぬる」

［顕注］四〇一
かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかはかじあはむよまでに
そぼちぬるとは、ぬるゝをばそぼつといふ也。露にそぼつなどもよめり。

顕注四〇一は「そぼちぬる」の説明だが、そのなかの「そぼつ」は『古今集注』六三九で「そぼつとはぬるゝをよめり。ふりぬらしつゝとよめるにや。」と述べ、顕注[30]六三九でも「降そぼつとは、ふりぬらすといふが、さきにも白露をわけそぼつとよめり。げにも涙に袖のそぼちなばともよめり。」と古今集438を引用しながら説明している。
あさ露をわけそほちつつ花見むと今ぞの山をみなへしりぬる　（古今集438・をみなへし）
「そぼつ」は古今集では以上に加えて422・655の計五例、拾遺集二例（よしのぶ・よみ人しらず）新古今集二例（伊勢大輔・国信）をはじめ平安時代を通して多くの用例が見られる。
それに対し、顕注で新たに注が付けられた四〇一の「そぼちぬる」は敦忠集・多武峰少将物語・下野集・周防内侍・堀河百

首（師時）・金葉和歌集三奏本（堀河院御製）・久安百首（隆季）・親宗集・山家集・唐物語と、院政期を中心に用例が散見する。

この「そぼちぬる」に似た「そぼぬる」[31]が、院政期以降、散木奇歌集二例・為忠家初度百首（仲正）・為忠家後度百首（為忠）・言葉集（仲綱）に見られ、顕注に近い時期では『正治初度百首』の範光詠に見られる。

深山いづるすそ野の鹿を朝立ちて袖そぼぬるる夏がりの露
（正治初度百首1535・範光）

『古今集注』と顕注六三九で「そぼつ」の注を付けたうえ、顕注で新たに四〇一「そぼちぬる」に注をつけたのは、範光詠の「そぼぬるる」がきっかけだったかもしれない。

K、二二二「ふりはへて」

［顕注］　二二二

春日野の若菜摘にや白妙の袖ふりはへて人の行らん

袖ふりはへてとは、袖うちふりてと云事也。はへてとは、打はへて、をりはへてなど云詞也。

「ふりはへて」は勅撰集だけでも次の例があり、私家集でも古今集から堀河百首の頃にかけて用例が散見する。

ふりはへていざふるさとの花見むとこしをにほひぞうつろひにける　（古今集441・しをに・よみ人しらず）

白雪のふりはへてこそとはざらめとくるたよりをすぐさざらなん　（後撰集480・よみ人しらず）

ふりはへて人もとひこぬ山ざとは時雨ばかりぞすぎがてにする　（千載集413・二条太皇大后宮肥後）

古今集441は「花見む」と春の行楽を詠む。後撰集480「ふりはへて」は「白雪」が「降る」との掛詞であり、千載集413は「時雨」が「降る」との掛詞である。

私家集などを確認すると

ふりはへてはなみにくればくらぶやまいとどかすみのたちかくすらむ　（亭子院歌合17・興風）

ふりはへてきみがためにとはるののにつめるかたみのわかなりけり　（忠見集60・わかな）

なつやまのしげきおもひをふりはへてしげらすほどにみちまどひけり　（元真集102）

山たかみみねの白雲ふりはへてかへるとおもへばものうかりけり　（元真集267）

ふりはへてなににかきみがさらにゆくここぞやここぞしらかはのせき

（能宣集177「みちのくのかみさねとしの朝臣のくだるに、餞しかはらの院にてしはべるに、まかりあひ侍りて」）

など、古今集に見られた行楽の歌があるが、この詠み方はいったん見られなくなり、後撰集に見られた掛詞[32]を用いた詠み方が主流になる。斎宮女御集・保憲女集・高遠集・肥後集・和泉式部集・相模集・伊勢大輔集・経衡集・周防内侍集・紀伊集などに用例が見られるが、「雨」「雪」「あられ」「すず」などとともに詠まれている。『千五百番歌合』にも同様の例がある。

はつしぐれふりはへてこそとはずともみやこの雪のよそに

だに見よ　　（千五百番歌合1691・通親）

この歌の判は定家だが「庭のあさぢのかれゆくけしきも心なきには侍らねど、みやこの雲のよそにだになど侍るはことによろしく侍るべし」と「ふりはへて」には触れていないが、密勘二二で次のように述べる。

［密勘］二二

打振ての心、強不可違。数多人の若菜つみにと過ゆく景気、野外眺望、春興となるが実に打はへてなど申詞にかよはして心得べし。

定家は「打振ての心」について「強不可違」「打はへてなど申詞にかよはして心得べし」と、顕注二二「はへてとは、打はへて、をりはへてなど云詞也」に賛同している。「数多人の若菜つみにと過ゆく景気、野外眺望、春興となる」と述べるが、「ふりはへて」を「春興」と結びつけた例が、建仁元年十一月の『仙洞句題百首』の定家詠に見られる。

あともなき山ぢの桜ふりはへてとはれぬしるき谷のしば橋　　（拾遺愚草1845・院句題五十首建仁元年十一月・橋下花）

「ふりはへて」は古今集二二や441・亭子院歌合17・忠見集60など、もともと若菜や桜の「野外眺望」「春興」の歌の中で詠まれていた。しかし、後撰集480以降、掛詞の関心で詠まれるようになり、「春興」を読んだものは次の二首くらいである。

はる雨のふりはへてゆく人よりは我まづつまんやせがはのせり　　（古今和歌六帖3864・せり）

ふりはへてゆきし心ははるさめのあしよりさきにいそがれしかな　　（相模集430・二月）

後撰集あたりから主に掛詞の興味で詠まれてきた歌語「ふりはへて」に対し、古今集で見られたものの後撰集以降廃れてしまった「春興」の「ふりはへて」を、定家が『仙洞句題五十首』の中で復活させたと考えることができるのではないだろうか。

『仙洞句題五十首』は建仁元年十一月、顕注成立の上限、建仁元年三月以降に近い。顕注には「野外眺望」「春興」については述べられていないが、顕昭は『仙洞句題五十首』の定家詠に接し、後撰集以降の詠み方とは異なる、古今集のころの「ふりはへて」本来の詠み方に注目し、顕注で注を書き入れたのではないだろうか。

以上、新古今時代に用例が見られるものをまとめると次のようになる。

二三「霞の衣」：当時の流行

「ぬきをうすみ」：『御室五十首』（生蓮）

一六九「目にはさやか」：『千載集』（守覚法親王）・建久元年に慈円詠。

五一五「ひもゆふぐれ」：「正治元年冬左大臣家十首歌合」（定家）・『千五百番歌合』（家隆）

一〇四五「野飼」：『六百番歌合』（家房）・『正治初度百首』（生蓮）・『正治後度百首』（長明）

一〇七六「霜やたび」：慈円二例「十題百首」と『正治後度百首』・良経「西洞隠士百首」

九一〇「おきつしほあひ」：建永元年家隆詠まで『松浦宮物語』のみ。
「しほあひ」：『袖中抄』に引用された『後拾遺集』通俊詠など・『正治後度百首』（越前）
二六九「久方雲上」：『千五百番歌合』（良平）
「あまつ星」：『正治初度百首』（惟明親王）
四〇一「そぼちぬる」に似た「そぼぬる」：『正治初度百首』（範光）
二二一「ふりはへて」：『仙洞句題五十首』（定家）

本稿一章・二章からは次の例がある。
一〇八一「かたいと」を「よる」：『正治初度百首』（定家）
四九五「いはつつじいは」：『正治初度百首』（式子内親王）
一〇六七「ましこ」の注の中の「てりましこ」：「十題百首」（寂蓮）・『正治初度百首』（惟明親王）

これに注(3)拙稿で言及した例を加えたい。
二九二「たのむかげ」：建久二年の顕昭詠。
五六「こきまぜて」：定家に「花月百首」など建久期に三例・『老若歌合』良経
二二二「とればけぬ」：「建久六年ころ、左大将にて」定家・『千五百番歌合』（讃岐・通具）
一六八「ゆきかふ」：建仁元年三月の後鳥羽院詠・建仁元年八月の定家詠。
「かたへ涼し」：『正治初度百首』（小侍従）・『正治後度百首』（後鳥羽院）

以上を時期ごとに分類すると以下のようになる。複数の時期に見られるものは、顕注成立上限建仁元年三月以前のものは重出し、『千五百番歌合』は除いた。

建久期
二九二「たのむかげ」：建久二年の顕昭詠。
五六「こきまぜて」：定家に「花月百首」など建久期に三例
一〇六七「ましこ」の注の中の「てりましこ」：「十題百首」（寂蓮）
一〇七六「霜やたび」：「十題百首」（慈円）
一〇四五「野飼」：『六百番歌合』（家房）
二二二「とればけぬ」：「建久六年ころ、左大将にて」定家
二三一「ぬきをうすみ」：『御室五十首』（生蓮）

正治期
一六八「かたへ涼し」：『正治初度百首』（小侍従）・『正治後度百首』（後鳥羽院）
二六九「あまつ星」：『正治初度百首』（惟明親王）
四〇一「そぼちぬる」に似た「そぼぬる」：『正治初度百首』（範光）
四九五「いはつつじいは」：『正治初度百首』（式子内親王）
一〇四五「野飼」：『正治初度百首』（生蓮）・『正治後度百首』（長明）

一〇八一「かたいと」を「よる」：『正治初度百首』（定家）
一〇六七「ましこ」の注の中の「てりましこ」：『正治初度百首』（惟明親王）
九一〇「しほあひ」：『正治後度百首』（越前）
五一五「ひもゆふぐれ」：「正治元年冬左大臣家十首歌合」（定家）

建仁元年以降

五六「こきまぜて」：『老若歌合』（良経）
一六八「ゆきかふ」：建仁元年三月の後鳥羽院詠・建仁元年八月の定家詠
二二「ふりはへて」：『仙洞句題五十首』（定家）
二六九「久方雲上」：『千五百番歌合』（良平）

四、用例がほとんどないもの

その一方、用例がほとんどないものにも注を加えた例がある。

A、六六八「山たちばな」

［顕注］　六六八
我恋を忍びかねては足曳の山たち花の色に出ぬべく
　山たちばなは、いろ紅にてことにうつくしき色なれば、色に出ぬべくとよめり。
［密勘］　六六八
　無不審。又所用、色にいでぬべく。
［古今問答］　六六八
やまたちばなの色にいでぬべし　山橘色何様物哉。葉ハ青ク実ハ赤也。

顕注六六八は「山たちばな」の説明である。「山たちばな」[33]は万葉集に五例見られ、『本院左大臣歌合』『古今和歌六帖』で題になっている。

『万葉集』で「イロニイデテ」「ミノテルモミム」、『本院左大臣家歌合』で「いろもかはらず」と詠まれているが、山たちばなの実体はわからない。これ以降、平安時代の用例は後に掲げる西行詠しか見当たらない。『古今問答』の「山橘色何様物哉」という問からも、当時の人に「山たちばな」がどういうものかわからなくなっていて、それ故当時関心をもたれていたことがうかがえる。『聞書集』に、

　ふかみどり人にしられぬあしびきの山たち花にしげる我が
　こひ　（聞書集116）

「ふかみどり」「しげる」と詠まれているので『古今問答』の答えの「葉ハ青ク」の通りであろう。「実ハ赤也」の方は顕注「いろ紅　にてことにうつくしき色なれば」と共通する。

用例が少なく、よくわからなくなってしまったものゆえ当時の人の興味をひいた「山たちばな」の注を顕注に書き加えたのではないだろうか。

B、一〇六四「はふらさじ」

次は、ほとんど用例が見られないのに『千五百番歌合』に見

られる歌である。

［顕注］　一〇六四

身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかゞなるとしるべく

はふらさじとは、人のわろきふるまひするをば、はふれたりといふ。されば身をこそすてめ、心をばうるはしうて、つひにあらんやうをまたんとよめる也。

顕注一〇六四は「はふらさじ」の説明である。この「はふらす」は、『新編国歌大観』では顕注成立上限の建仁元年三月以前の用例[34]は見あたらないが、『千五百番歌合』に「はふらさじ」がある。

いとはるる名はふらさじとおもひしをこころにあまる袖のむらさめ　（千五百番歌合2680・季能）

［顕昭判］左歌は、上句はさもときこえ侍るに、終句の袖のむらさめの詞、あまりあたらしきげや、ただし人のこのみこのみに侍れば、ひとすぢに申しさだめがたくはべり、めづらしとおもふ人も侍る歟。

この歌の判者は顕昭である。判の中で「はふらさじ」に触れていないが、この歌に接したことが、顕注で一〇六四に注を加えるきっかけになった可能性はないだろうか。

C、一〇五八「あふご」

最後に注(3)拙稿で取り上げた顕注一〇五八について。

［顕注］　一〇五八

人こふることをおもにとおもひもて逢期なき身ぞ侘しかりける

おもにとは荷のおもき也。おもひもては荷を持也。あふごはになふ木也。それをあふごにそへたり。

顕注一〇五八の「あふご[35]」は伊勢物語の

などてかくあふごかたみになりにけむ水もらさじと結びしものを　（伊勢物語61・第二八段・男）

をはじめ後撰集時代に二例見られる言葉で、後に金葉集や待賢門院堀川に例が見られるものの、顕昭と同時代の歌人にとっては、古臭い言葉であったと思われる。そのためか、千五百番歌合の有家詠では、伊勢物語歌を本歌取りしていながら「あふご」の語は使用していない。判の中で顕昭は次のように述べる。

なみだしもせきやはあへんむすびおく水ももらじのちぎりたがはば　（千五百番歌合2540・有家）

［顕昭判］左歌は、などてかくあふごかたみになりにけん水もらさじとちぎりしものを、と侍る歌の心ながら、あふごかたみの詞などは、あながちにとられずとも侍りぬべかりけり、水ももらさじのちぎりの詞、おもはれたるすぢ侍る歟。

この経験が「あふご」の語に注目するきっかけになった可能性はないだろうか。

まとめ

二章の検討から、先学[36]が指摘なさるとおり、顕注の成立と古

今集本文の問題は関わりがあることは確かだろう。

三章の新古今時代に見られる用例の検討の結果から、『古今集注』が成立した文治元年以降、建久年間あたりから顕昭が次に書く歌学書で追加すべき項目について考えていたであろう様子がうかがえる。

顕注で加注したきっかけを考えるとき、『正治初度百首』『正治後度百首』の用例の多さに注目したい。もちろん大規模な行事だったから当然だともいえるが、建久期の『六百番歌合』『御室五十首』がそれぞれわずか一例のみであることと比べると、『正治初度百首』『正治後度百首』の用例の多さは注目に値する。顕注を執筆する過程で、この二つの行事を顕昭が重視したのは、何らか理由があったのではないかと考える。

ところで序章で問題提起した、成立時期を『千五百番歌合』以前に遡らせることは可能か、についてであるが、『千五百番歌合』に用例が見られるものの多くは、その少し前に用例が見られた。例外として二六九「久方雲上」があるが、「久方雲上」の用例は『千五百番歌合』で初めてだが、「久方」「雲上」それぞれなら用例は数多い。同じ二六九「あまつ星」は『正治初度百首』の惟明親王詠があり、二六九番歌に注目したきっかけが『正治初度百首』の惟明親王の「あまつ星」であり、「あまつ星」の歌、二六九番歌の初句二句だったから「久方雲上」にも注を付したと考えれば、『千五百番歌合』にこだわる必要はなくなる。

四章で検討したように、『千五百番歌合』の中に、建仁元年三月以前の用例が少ない歌語を使用した詠歌で顕昭判のものが二例見られるため、顕注の成立時期が『千五百番歌合』の後である可能性は否定しきれない。しかし、顕注での加注のきっかけかと思われる用例について、建久期から積み重ねられていること、『和歌色葉』閲覧から間もない『正治初度百首』『正治後度百首』の用例が多いことから、成立時期について、『千五百番歌合』を遡って上限に近づけることができるのではないだろうか。

『正治初度百首』『正治後度百首』に用例が多いことから、顕注の宛先[37]は、後鳥羽院歌壇に関わる人物の可能性が高いと考える。注(3)拙稿や拙稿「『顕注密勘』考―なぜ密勘を書き入れなかったのか」[38]をふまえ、注(8)拙稿でも「顕注」は定家やその周辺の歌人たちの試みを肯定的に受け容れようとしていると述べたが、本稿の検討の中でも定家の用例は他の歌人と比べても多く見られる。このような定家の詠歌への肯定的な関心は、顕昭ひとりの意図だけではなく、宛先の事情も関わっているかもしれない。

顕昭は『和歌色葉』を閲覧した建久九年以降、『奥義抄』や『古今集注』を踏まえたうえで、新たに次の歌学書に書くべき項目として建久期ころから用意していたものに加えて、『正治初度百首』『正治後度百首』を重視し、その詠歌傾向にあわせて注目した歌語を持つ歌に新たに加注し、建仁元年三月以降、顕注を執筆した。[39]それ故に後鳥羽院歌壇の傾向を考慮してあらかじめ顕注に加注しておいた「はふらさじ」「あふご」について、『千五百番歌合』で「はふらさじ」を本歌取した季能詠や「あふご」に関わる有家詠の判を書くことになった、と推定す

ることができるなら、成立時期を、以前稿者が推定した『千五百番歌合』から遡って、成立年代上限の建仁元年三月に近づけることは可能であろうと考える。

稿者はかつて『五代簡要』の執筆動機について「藤原定家[40]は、歌句の抄出の基準としては過去に存在した歌題や将来ありうる歌題を念頭に置き、当時十七歳の九条道家の存在を意識しつつ、ゆくゆくは道家が主催するであろう和歌行事を想定しながら、本書を執筆し始めたのではないか」と述べた。「顕注」もまた、顕昭が、建仁元年三月以降、これまで蓄積してきた歌学の知識に加え、『正治初度百首』『正治後度百首』の詠歌傾向を考慮し、来たるべき『千五百番歌合』など後鳥羽院歌壇の次の和歌行事を想定し準備したものをもとに、後鳥羽院歌壇と関わりの深い人物を宛先に、執筆したのではないかと考えている。

注

(1) 久曾神昇「解題三、顕注密勘抄」(『日本歌学大系別巻五』風間書房　昭和五十六年)

(2) 柳瀬万里「古今顕昭註五書―顕昭の古今諸註釈の関係について Ⅰ―」(『王朝』第七冊　昭和四十九年)「古今顕昭註五書―顕昭の古今諸註釈の関係についてⅡ―」(『王朝』第八冊　昭和四十九年)

(3) 拙稿「『顕注密勘』の顕昭注の成立時期について」(『中世文学』第五十五号　平成二十二年)顕注一〇〇九の検討は以下の通り。

[顕注]　一〇〇九

はつせ川ふる河のべに二本有杉としをへて又もあひみんふたもとあるすぎ

はつせ河の古河岸の辺に二本の杉たてりけるによせてよめりける歌歟。近代の達者初瀬山にふたもとの杉よまれて侍き。古今によらば、はつせ河とよむべき也。何故河詠山乎とかたぶき侍し程に、後に院御歌合には、はつせ川ふたもとの杉をよまれて侍しかば、勘なほされにけりと心おちゐ侍にき。

「近代の達者はつせ山にふたもとの杉よまれて侍き。」は「はつせ山」「ふたもとの杉」を詠んだ建久六年(一一九五)の民部卿家歌合の釈阿詠を

ほのみゆる梢はそれか初瀬山雪のあしたのふたもとの杉　(民部卿家歌合183・釈阿)

「後に院御歌合には、はつせ川ふたもとの杉をよまれて侍しかば」は建仁元年(一二〇一)三月の『新宮撰歌合』の釈阿詠を

泊瀬川又見むとこそたのめしか思ふもつらし二もとの杉　(新宮撰歌合57・釈阿)

さすと思われ、顕注の成立時期の上限は建仁元年(一二〇一)三月以降と推定できる。

(4) 鎌田智恵「『顕注密勘』の顕昭注―『古今秘注抄』、『古今集注』との関係について―」(『国語国文』第八十八巻第四号　平成三十一年)

(5) 鎌田智恵「『顕注密勘』の顕昭注(続)―注釈の性格と目的について―」(『国語国文』第八十八巻第十一号　令和元年)

(6) 以下、注(3)拙稿で言及した、歌語の用例が成立年代上限の建仁元年を遡る例。

・二九二「たのむかげ」。建久二年(一一九一)三月若宮社歌合で、顕昭自身の詠作があり、判でも言及している。

・五六「こきまぜ」。建久五年(一一九四)の『六百番歌合』で隆信が使用し釈阿判でも言及された。「こきまぜ」は『後拾遺集』に見られるが、それ以降は『散木奇歌集』『清輔集』『林下集』に見られる程度だが、定家の詠作に六例見られ、建久年間だけでも花月百首・一句百首・三十一字歌「あきはなを」の三例。以降『老若歌合』良経など。

・一六八「ゆきかふ空」「かたへ涼し」。
「ゆきかふ空」は建仁元年の後鳥羽院詠と同年『和歌所影供歌合』の定家詠に見られ、同じとき雅経が「ゆきかふ風」と詠んでいる。
「かたへ涼し」は『正治初度百首』で小侍従が、『正治後度百首』で後鳥羽院が、『千五百番歌合』で慈円が詠んでいる。
『千五百番歌合』では通親が「ゆきかふかぜ」と「かたへ」を使用しているが、当該歌季経判で一六八の影響が指摘されている。
・二一二「とればけぬ」は万葉集に三例見られるものの、平安時代に入ってからは和泉式部詠に「とればきえぬる」が見られるくらいで、ほとんど見当たらないが、建久六年秋頃、定家が使用し、『千五百番歌合』では讃岐と通具に使用されている。

(7) 拙稿「『顕注密勘』考―顕昭注と『和歌色葉』との関わりをめぐって―」(『三田國文』第六十一号　平成二十八年)

(8) 拙稿「『顕注密勘』考―顕昭注と『和歌色葉』中巻・下巻との関わりをめぐって―」(『三田國文』第六十五号　令和二年)

(9) 『和歌色葉』の成立後、顕昭が閲覧したのは、建久九年(一一九八)か。黒田彰子「和歌色葉奥書再読―上覚と長房兄弟―」『中世和歌論攷―和歌と説話と―』(和泉書院　平成九年)の整理による。

(10) 四一の密勘は以下の通り。
あやなしとは、さてもかひなきにあぢきなくといふ様なる詞也。やくなしも実にいたくはたがはねど、歌によまぬ詞にも、あひなしなど申事も、おなじさまながらすこしはかはり侍にや。あやに恋しくは所存同。

(11) 『古今集注』一四八は以下の通り。
おもひいづるときはのやまのほとゝぎすからくれなゐのふりでゝぞなく
おもひいづるときはといはむとて、ときはのやまとつゞくるなり。ふりいでゝなくといはんとて、紅にはふりでといふことのあれば、からくれなゐのとはつゞくるなり。教長卿云、くれなゐのいろのこきをばふりでといへり。私云、ふりでとはふでとて、布のさいでをそめて、それをおろして、きぬをばそむれば、ふりでとはいふなり。それを筆にそへてよめり。ふりでとふむでと、まさしき詞はかはりたれど、ともにふでとうちいふことばにつくなり。又
おもひ出るときはのやまのいはつゝじいはねばこそあれこひしきものを
或人云、是は平仲が歌也。(以下、平仲歌説をめぐる考察。省略)

(12) 底本「思時」。中央大学本により「いづる」を補う。

(13) 底本「へて」。中央大学本により「筆」に改めた。

(14) 二五の『古今集注』と顕注は以下の通り。
[古今集注]　二五
わがせこがころもはるさめふるごとにのべのみどりぞいろまさりける
ころもははるものなれば、衣はるさめとつゞくるなり。わがせことはをとこをいふ。わぎもことはをむなをいふとぞ、ふるきものにはしるしたれど、をむなをもわがせこと、かへしていふべしと俊頼朝臣は釈して侍めり。又私に考万葉に、をとこの歌にて、をむなをわがせことよめることおほし。又をむなの歌にて、をとこをわがせことよめることおほし。さればつまといふことの、たがひにかよへるがごとし。然れども、をとこをわぎもことよめる歌はみえず。をとこはせこ、せな、どもいへば、わがせこともいひ、をむなをばいもといへば、我がいもといふとみゆるを、をむなをもわがせことよめるぞあやしけれど、ふるくおほくよみたることなれば、はじめてとかくまうすべからず。
[顕注]　二五
我せこが衣春雨降ことに野べの緑ぞ色まさりける
吾せことは、わがをふと、いふ也。又せことも、せとも、せなとも、わがせともいふ。打任てはふるき物にも我せこはをとこをいふ、わぎもことは妻をいふ。されば、いもせとは女男を申に、女をも我せことよめる歌多し。男をも女をもわがせことよめる

也。妻をいもと申をわぎもこといふは、わがいもうとゝ万葉には書て侍る也。我背子が衣春雨とは、めのはる物なればつゞけたる也。又をとこのきぬをめのはるべければ、わがせこが衣はる雨とつゞくる歟と申説あれど、それはあながちにみゆる。

(15) 以下、古今集本文の検討は久曽神昇氏の『古今和歌集成立論』(風間書房　昭和三十五年)による。

(16) 一〇一の『古今集注』は以下の通り。

[古今集注]　一〇一

さくらばなちくさながらにあだなれどたれかははるをうらみはてたる

ちくさとは、さまゞ〳〵のものをぞつねにはよめど、さくらひとつにとりても、かれこれをちくさとよみたるなり。

(17) 浅田徹「定家本とは何か」(『国文学　解釈と教材の研究』平成七年八月号)

(18) 上野順子「御子左家歌学の形成―『顕注密勘』攷―」(和歌文学論集第十集『和歌の伝統と享受』風間書房　平成八年)

(19) 顕注の古今集本文については注(17)浅田論文・注(18)上野論文に加えて、次の論文で研究が積み重ねられている。

東野泰子「定家歌学と六条家説―『僻案抄』をめぐって―」(大阪市立大学『文学史研究』第三十三号　平成四年)・浅田徹「顕注密勘の識語をめぐって」(『和歌文学研究』第七十二号　平成八年)・紙宏行「古今集注釈史の始発―崇徳院御本をめぐって―」(『文芸研究』百四十五集　平成十年)・紙宏行「実作と注釈との往還」(『中世文芸の表現機構』おうふう　平成十年)

(20) 一一一「なへて」の本文は以下の通り。

「なへて」:昭和切・六条家本・天理本

『五代簡要』・『定家八代抄』・『秀歌大体』

「なめて」の「め」に「へ」を傍書:永暦本

「なめて」:建久本・寂恵本・伊達本など前記以外多数

(21) 三六七の顕注と密勘は以下の通り。

[顕注]　三六七

限なき雲ゐのよそに別とも人を心におくらさむやは

此歌は大和物語には詞有。遍昭僧正出家の時、山々寺々おこなふとてかくれありき給ふ時、五条の后の御使をつかはして侍けるに、をさなきものどものわすれ侍らぬよしをなど申して読めるよし有。下句は人を心におくらざらめやと有。とほく立はなれたれど、心をばおもひおくるとよめるにこそ。おくらざらむやは、人に思ひやる心はさきだちてこそあれ、たちおくるべからずといふ心にや。

[密勘]　三六七

人を心におくらざんやはを用。身は野山のすゑに有ながら心に人をおくらさぬ心也。

三六七については、三木麻子氏が「『顕注密勘』と定家の和歌表現」(『王朝文学の本質と変容　韻文編』和泉書院　平成十三年)で詳細な検討をなさっているので、本稿では、検討を省略し、顕注執筆当時、三六七の本文の異同が問題になっていて、それが顕注で新たに注を加えたきっかけになったのではないか、と指摘するにとどめたい。

(22) 底本「ましら」を中央大学本で校訂。

(23) 熊野懐紙の他の例は以下のとおり。

うらさむくやそしまかけてよるなみをふきあげの月にまつかぜぞふく

(熊野懐紙64・建仁元年十月九日・海辺冬月)

おきつかぜふきあげのはまにすむ月はしもかこほりかうらのあま人

(熊野懐紙72・建仁元年十月九日・海辺冬月)

しほ風やふきあげの月にくもきえてしもよりうへにしもぞこほれる

(熊野懐紙86・建仁元年十月九日・海辺冬月)

しほ風や吹上の浜の空さえて月影みする雪の明ぼの

(熊野懐紙100・建仁元年十月十四日・浜月似雪)

(24) 小林一彦「「霞の衣」と「霞の袖」と―表現史上における藤原俊

成と「艶」―」（『洗足論叢』二三　平成六年）

(25)　小林一彦「天の香具山の衣―百人一首古注を窓に持続天皇歌を読む―」（『魚津シンポジウム』十号　平成七年）

(26)　「ひもゆふぐれ」の他の用例。

道とほみ日も夕ぐれになりぬればそのはらまでとさしてこそゆけ　（永久百首533・原・大進）

(27)　「ひもゆふぐれ」の新古今集の例。

おのづからすずしくもあるか夏衣ひもゆふぐれの雨のなごりに　（新古今264「崇徳院に百首歌たてまつりける時」藤原清輔）

みそぎする河のせ見ればから衣日もゆふぐれに浪ぞ立ちける　（新古今284「（延喜御時月次屏風に）」貫之）

浦人の日もゆふぐれになるみがたかへる袖より千鳥鳴くなり（新古今650「おなじ所」（最勝四天王院の障子に、なるみの浦かきたるところ）通光）

いづくにかこよひは宿をかり衣日もゆふぐれのみねの嵐に　（新古今952「摂政太政大臣家歌合に、羈中晩嵐といふ事をよめる」定家）

(28)　「かみのきね」の用例は『拾遺集』に見られる。

あしひきの山のさかきはときはなるかげにさかゆる神のきねかな

（拾遺集618「延長四年八月廿四日、民部卿清貫が六十賀中納言恒佐妻し侍りける時の屏風に、かぐらする所のうた」貫之）

ほか、貫之集・躬恒集・能宣集・古今和歌六帖など。

(29)　「たちさかゆ」の用例は、久安百首の小大進の短歌のみ。

『千五百番歌合』以前に、一首の中で「久方」「雲上」を一緒に使用した歌は次の一例のみ。

くものうへにさそはざりせばひさかたの身にそふかげもおくらざらまし

（小大君集141「うちにまゐるに、さねかたの中将、月こそあかけれとの給うしかば」）

(30)　六三九の頭注・『古今集注』は以下のとおり。

［頭注］　六三九

明ぬとて帰道にはこきたれて雨も涙もふりそぼちつゝ

（「こきたれて」の注、略）降そぼつとは、ふりぬらすといふが、さきにも白露をわけそぼつとよめり。げにも涙に袖のそぼちなばともよめり。

［古今集注］　六三九

あけぬとてかへるみちにはこきたれてあめもなみだもふりそぼちつゝ

（中略）そぼつとはぬるゝをよめり。ふりぬらしつゝとよめるにや。さきにも、しらつゆをわけそぼちつゝとよめり。下にも、なみだにそでのそぼちなばとよめり。

かぎりなくおもふなみだにそぼちぬるそではかはかじあはむひまでに

ともよめり。

(31)　「そぼぬる」の用例は以下のとおり。

思へただたもとは露にそぼぬれてたちやすらひし夜半のけしきを　（散木奇歌集1067）

わが袖をひぢかさ雨にそほぬれてさぼすといはん君もぞおこる　（散木奇歌集1087「雨中恋といへる事を」）

あめふればかきねのしとどそぼぬれてさへづりくらすはるの山ざと　（為忠家初度百首70・閑中春雨・仲正）

さみだれにくまのむかばきそぼぬれてあけゆくいてやことりなるらん　（為忠家後度百首719・騎射・為忠）

ありふればかきねのしとどそぼぬれてさへづりくらすはるの山里　（言葉集251「閑中春雨を」源仲綱）

(32)　「ふりはへて」の用例。「降る」「振る」との掛詞のものは、何が「ふる」のか、「ふる」ものに網掛けを施した。

はる雨のふりはへてゆく人よりは我まづつまんやせがはのせり　（古今和歌六帖3864・せり）

ふりはへてとはぬすずかのやまみちにいとどやふゆはゆきへだつらん　（斎宮女御集225）

くもはれぬあられをみればふりはへてさむさのくるにわびしかりけり　（保憲女集117）
雪ふかくつもりてのちは山里にふりはへてくる人のなきかな　（落窪物語62）
ぬれぬともしぐれもよよとふりはへてみてこそやまめかみなびのもり　（高遠集362）
すずか山ふりはへてゆくみちよりや人のおもひのならんとすらん　（肥後集134）
ふりはへてたれはたきなんふみつくる跡みまほしき雪の上かな　（和泉式部集528）
雨もよにいづちなるらんふりはへてきたりときかば哀ならましふりはへてゆきし心はほるさめのあしよりさきにいそがれしかな　（和泉式部続集263）
はつゆきのふりはへてこそあじろぎにひをのよるをばまちあかしつれ　（相模集430・二月）
ふりはへてたれかはくべき雨もよにつきのもるをもひとりこそ見れ　（伊勢大輔集51）
ふりはへてこしぢやとほきこえやらでよるしも山にかかる白雪ふりはへてたづぬるのべのゆふぐれはすずむしのねぞしるべなりける　（経衡集77）
ふりはへてとはんものとはおもはねどみみのみとまるすずか山かな　（前右衛門佐経仲歌合7・高階政業）
（33）「山たちばな」の用例は以下のとおり。カタカナは『万葉集』、『新編国歌大観』の旧訓。
669　足引之アシヒキノ　山橘乃ヤマタチバナノ　色丹出而イロニイデテ　語言継而カタラヒツギテ　相事毛将有アフコトモアラム
1340　紫ムラサキノ　糸乎曽吾搓イトヲゾワレヨル　足檜之アシヒキノ　山橘ヤマタチバナヲ　将貫跡念而ヌカムトオモヒテ
2767　足引乃アシヒキノ　山橘之ヤマタチバナノ　色出而イロニデテ　吾恋南雄ワガコヒナムヲ　八目難為名ヤメカタクスナ
4226　此雪之コノユキノ　消遺時尓ケノコルトキニ　去来帰奈イザカヘナ　山橘之ヤマタチバナノ　実光毛将見ミノテルモミム
4471　気能己里能ケノコリノ　由伎尓安倍弖流ユキニアヘテル　安之比奇之アシヒキノ　夜麻多知波奈乎ヤマタチバナヲ　都刀尓通弥許奈ツトニツミコナ
あきごとにきりはふれどもあしひきのやまたち花はいろもかはらず　（本院左大臣家歌合13・山たち花）
みねだにやすみうくならんあしひきのやまたち花のみやまゐをせる　（本院左大臣家歌合14・山たち花）
わが恋をしのびかねてはあしひきの山たちばなの色に出でぬべし　（古今和歌六帖3935・やまたちばな・とものり）
けのこりの雪にあひたるあしひきのやまたちばなをつとにつめらな　（古今和歌六帖3936）
あしひきの山たちばなのいろにいでて我がこひなんをやめん方なし　（古今和歌六帖3937）
（34）「はふらさじ」はあと一例。
かくしつつけなむのちにもあはゆきのあはぬうきなをよにはふらさじ　（檜葉和歌集393「題不知」読人不知）
（35）「あふご」の用例は以下のとおり。
みるめかるなぎさやいづこあふごなみ立ちよる方もしらぬわが身は　（後撰集650「題しらず」在原元方）
あふごなき身とはしるしる恋すとて歎こりつむ人はよきかはなげきをぞこりわびぬべきあふごなきわがかたきえてもちしわぶれば　（後撰集1043）
あふごなくこひしきをのみこりつみて夏のよすがらもえあかすかな　（平中物語13・男）
こりつむるなげきをいかにせよとてかきみにあふごのひとすぢもなし　（左兵衛佐師時家歌合25）
あふごなき物としるしるなにかはなげきをやまとこりはつむ　（金葉集494・題読人不知）

らん　（金葉集498・題読人不知）
あふごなきなげきのつもるくるしさをとへかし人のこりはつる
まで　（久安百首1080・待賢門院堀川）

(36) 注(17)注(18)注(19)参照

(37) 注(5)鎌田論文では宛先は顕昭の弟子の幸清であると提案なさっている。

(38) 拙稿「『顕注密勘』考―なぜ密勘を書き入れなかったのか」（『藝文研究』第百一号　平成二十三年）

(39) 注(4)鎌田論文では注(3)拙稿の「あふご」の説明を引用なさったのち、「その可能性は確かに否定できないが、右の例は逆にも解釈しうる。顕注で既に「あふご」に注目し注を付していた顕昭が、後に『千五百番歌合』で『伊勢物語』歌を踏まえた有家詠に接し、そこに読まれていない「あふご」にわざわざ言及したとの見方も可能であろう。反証があるわけではないが、顕注で同歌合からの影響を確実に指摘できる例は管見では見いだせない。『千五百番歌合』との関係については、同歌合に当時の歌壇の関心・傾向が反映されており、それ故に顕注で新たに注が付された歌語との共通性を指摘しうるという程度の理解に留めるのが穏当であろう。」と指摘なさっているが、なぜ「同歌合に当時の歌壇の関心・傾向が反映されて」いることに対し「それ故に顕注で新たに注が付された歌語との共通性を指摘」できるのか、「それ故」―その理由については説明なさっていない。本稿では鎌田氏が「それ故に」とおっしゃる、その理由を『正治初度百首』『正治後度百首』など具体例とともに説明させていただいた。

(40) 拙稿「『五代簡要』考―九条道家との関わりをめぐって―」（『三田國文』第五十九号　平成二十七年）

○『顕注密勘』は内閣文庫本（200―55）を使用し、句読点・濁点を付し、和歌の引用箇所は二字下げて改行、仮名遣い・漢字などは通行のものに改めた。対校本文として中央大学本（『顕注密勘』財団法人古典文学会　昭和六十二年）を使用。

○『奥義抄』は『大東急記念文庫善本叢刊』（汲古書院　平成十五年）を使用。

○『古今問答』は『天理図書館善本叢書』（八木書店　昭和五十七年）を使用。

○ほかは『日本歌学大系』を使用。そのうち別巻四所収の顕昭の著作は片仮名を平仮名に改めた。

○和歌本文は特に断らないものは、『新編国歌大観』を使用。

○傍線は稿者が私に付したものである。

（にった・なおこ）